



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自然栽培が織りなすケアの場：農福連携を行う生活介護・就労継続支援B型事業所のエスノグラフィー [全文の要約]
Author(s)	福島, 令佳
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 <a href="https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/">https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/</a>
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15066号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/85463">https://hdl.handle.net/2115/85463</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Reika_Fukushima_summary.pdf



# 学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 福 島 令 佳

## 学位論文題名

自然栽培が織りなすケアの場：  
農福連携を行う生活介護・就労継続支援 B 型事業所のエスノグラフィー

### 1. 問題の設定と研究目的 自然栽培はケアの場に何をもたらすのか

農業従事者の減少と農林水産業への障害者の雇用増加を背景に、厚生労働省と農林水産省による障害者を農業の貴重な担い手として位置づける農福連携が推進されている（厚生労働省・農林水産省 2017）。

しかし、「農」の連携先であるケアの場では、ケアに関する多くの課題を抱えている。

国立重度知的障害者総合支援施設のぞみの園研究部が行った「都道府県・政令指定 16 市・中核都市における生活介護・就労継続支援 B 型事業所の評価についての実態調査」によると、生活介護・就労継続支援 B 型事業所において、利用者の権利擁護や利用者の個々の特性に合わせた支援の実施が十分に行われていない状況が明らかになった（岡田ら 2019）。

そのような中、農福連携を行う生活介護・就労継続支援 B 型事業所において近年、異彩を放つのが、一般社団法人農福連携自然栽培パーティ全国協議会（以下自然栽培パーティ）の取り組みである。農福連携を通じて、全国に自然栽培を広げる取り組みをしている。そこには、生物の力を生かす自然栽培ならではの営みがある。自然栽培パーティの拡大は、目を見張るものがあり、2015 年には 5 つの事業所でスタートしたが、2016 年には一般社団法人となり、5 月には 25 事業所になった。そして、2020 年時点では、総会員数は 99 か所であり、その内農業を行っている障害者施設が 62 か所、農業は行っていないが協賛している障害者施設、企業や個人は 37 か所（自然栽培パーティ理事長磯部氏への聞き取り 2020 年 8 月時点）という目覚ましい勢いで拡大している。拡大の範囲も福祉分野や農業分野に留まらず、学校や異業種の企業も巻き込んだ多様な範囲となっている。

2017 年に行った予備調査（愛媛；第 2 部参照）におけるフィールドワークでは、なぜ、自然栽培を行うケアの場では利用者が生き生きとしているのか、支援者と利用者の関係性が「福祉っぽくない」のか、そして、よそ者である私にとっても居心地が良いのかという素朴な疑問から、自然栽培がケアの場にもたらすものは何かという問いが生まれた。その後のフィールドワークにおいて、自然栽培とケアの親和性が見られたことから、自然栽培がもたらすものをケア論の理論枠組みでみると何がみえるのかという事に関心を持った。

よって、本論文は、福祉人類学の立場から現代日本における福祉とケアを論じようとするものである。障害者総合支援法に基づく障害者の就労継続支援の中でも、より多様な障害者が利用する就労継続支援 B 型事業所を中心に調査を行った。予備調査を含めると計 5 か所、本論で主に扱われたものでは 4 か所の就労継続支援 B 型事業所（そのうち一か所は生活介護事業所を併設）にて、4 年 8 か月の期間、断続的にエスノグラフィック・フィールドワークを実施した。それらの現場では、無農薬・無肥料の生物の力を生かす農業である自然栽培が行われており、そこに独自の「ケア」を内側から描き出し、分析することが本論文の目的である。その際の理論的な視角として福祉人類学におけるケア論にて、障害者へのケアを相対化し、ケアの文化的多様性をみていく。また、人類を他の生物種との関連でみていこうとするマルチスピーシーズ人類学を援用する。これによって、支援者と利用者という人間だけではなく、栽培植物や土壌微生物等も含めた関わり合いの中で「ケア」を捉えることを試みた。

以下に本論文の構成について述べる。

## 2. 本論文の構成

第1部では、福祉人類学的研究におけるケアの主題化と研究目的について述べる。はじめに、ケア論に必要なアプローチについて述べる。本研究では、ケアの定義を追求し、ケアとはこうあるべきという規範的なアプローチを行うのではなく、記述的なアプローチによって、実際のケアの実践を描く立場をとる。また、ケア論における福祉人類学的研究の意義から、本研究の主な研究方法としてエスノグラフィーを用いる。本研究の目的は、支援者の障害者に対する思い込みから生じるケアの課題に対して、先行研究では未だ十分に明らかにされていないケアされる側の記述とマルチスピーシーズ的な関りを含むその場に集うものたちの営みに焦点を当てた記述を行い、自然栽培による農福連携の現場において、どのような条件の下で、そこに独自のケアの実践とその関係性が生まれているのか、もしくは消えていくのかの過程を明らかにすることにある。

第2部では、調査の背景と概要について述べる。調査の背景として、自然栽培の世界観、農福連携や生活介護・就労継続支援B型事業所といった調査地を理解し、分析するうえで必要な背景を提示する。そして、自然栽培で農福連携を行う具体的な現場である生活介護事業所と就労継続支援B型事業所における調査期間等の概要を述べる。

第3部では、自然栽培の世界観を体現したケアの場において、いかなる従来のケアがなされなくなり、いかなるケアや新たな関係性を具現化しうるのか関するに条件を記述する。Y事業所は、自然栽培の世界観を体現したケアの場であるといえる。土、微生物や虫に至るまで、人間以外にも重要なケアの担い手として位置づける自然栽培の世界観が、そのままY事業所というケアの場を生成している。人間以外の生き物も含むマルチスピーシーズ的な関りとそのようなケアの実践から自然栽培の場を捉えることによって、どのような独自のケアや新たな関係性がみえてくるだろうかを問う。そして、このような条件が、ケアの場としての就労継続支援B型事業所の諸課題にもたらす可能性を論じる。

第4部では、自然栽培という条件の下で、いかなる文脈で、そこに独自のケアの実践とその関係性が生まれているのか、もしくは消えていくのかの過程を明らかにすることにある。支援者の障害者に対する思い込みやあるべき支援に障害者を合わせようとするケアの構造は、自然栽培によるケアの場において、どのような過程を経て、どのように転換されうるのかについて述べる。先行研究では、支援者に対して、こうあるべきというケアの規範が課せられている。しかし、そうした規範を実践するために、思い込みに基づくケアから解放されるための具体的な方法は示されていない。そのため、本研究では、先行研究において、繰り返し指摘されているケアの規範が自然栽培を行うと、実際にどのように実現しうるのかをみていくと同時に、支援者に課せられたケアの規範そのものを問う。その結果、ではどうすれば良いのか、実際にどういった場面で、支援者の思い込みと、それに基づく管理のためのケアがなされなくなるのかの過程がみられた。そして、自然栽培独自のケアが、身体性のある動きの中で生み出され、そこに集うものたちが新たな関係性を築いていく過程がみられた。

第5部の目的は、自然栽培を行うケアの場において、約4年8か月にわたって、長期のフィールドワークを行ってきた調査者のオートエスノグラフィーを行うことにある。自然栽培の世界観によってもたらされるものについて、内側から考察する。具体的には、オートエスノグラフィーの特徴を生かし、長期的な時間の流れの中で、自然栽培の世界観とケアを通じて、個人の心身の状況、思考や行動や周囲がどのように変化したのかをみていく。また、分析の際には、調査者のソーシャルワーカー経験の視点も入れながら、ケアする側の変化についても考察を深めていく。

終章では、自然栽培では愛が重要なケアであること、栽培植物に話しかけることや虫等の人間以外の生き物もケアの担い手として尊重するマルチスピーシーズ的な関わりといった管理しない世界観によって、多くの驚きや感情が揺さぶられる経験が生み出され、虫も、土壌微生物も、そして支援者と障害者もそれぞれが存在感を持っていた。

このように、合理的配慮の方向性とも異なる「ただ存在すること」や障害者の愛や感覚が正当に認められていた。そして、自然栽培の世界観は、栽培植物の本来の在り方を尊重するのと同様に、障害者の存在を尊重する独自のケアの営みを具現化していた。こうして、あるべき支援に障害者を合わせようとするあまり、コントロールする方向に陥りがちなケアがなされなくなってい

く過程がみられた。そして、障害者を尊重するといったケアの規範は、支援者のみの努力で実現するものではなく、自然栽培の世界観が体現されたケアの場の力が大きく影響していた。それは、支援者という立場の人間が一方的に障害者を尊重するという規範の実現ではなく、土や虫も含むその場に集うものたちが、互いに尊重し合うことで成り立つ場の営みの結果であった。

こうしたケアの営みは、従来のケア論では、論じられることがほとんどみられなかったマルチスピーシーズ的な関りとケアされる側にも焦点を当てたことで、みえてきた。そして、分断されていた支援者と障害者の世界がどのようにつながっていくのかが明らかになった。さらに、ケアする側とされる側という人間の二者関係に留まらず、ケアの場に人間の他にも生き物が加わり、人間のみのケアの場にはみられない「共にケアする仲間」という新たなケアの関係性の広がりが見えてきた。

また、巻末に付録として、自然栽培の世界観に関する分類（福島 2021）を付す。これは、2014年から2019年の5年間にわたって、全20巻が刊行された木村秋則氏が監修の季刊書籍『自然栽培』を分析したものである。自然栽培を実践する多様な人々が、畑や田んぼで得た気づきや感動に関する記述から、マルチスピーシーズ的な関りを含む自然栽培の世界観を抽出し、分類した。本調査では、描ききることができなかった「植物の主体性」、「多様な生き物たちによるケア」や「自然栽培によってケアされる営み」といった概念が抽出できた。本研究における多様で柔軟な自然栽培の世界観を補強してくれる内容となっている。

## 参考文献

厚生労働省・農林水産省

2017 『福祉分野に農作業を～支援制度などのご案内～』厚生労働省・農林水産省  
<https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/attach/pdf/kourei-86.pdf>  
2020年10月30日閲覧。

岡田裕樹、日詰正文、古屋和彦

2019 「都道府県・政令指定都市・中核都市における生活介護・就労継続支援 B 型事業所の評価についての実態調査」『国立のぞみの園紀要』12:29-38。

福島令佳

2021 「自然栽培とケアの質的研究：季刊書籍『自然栽培』の内容分析から」『北海道大学研究論集』20:73-90。